

ごあいさつ

代表世話役 西本 孝

桜の季節は、開花までにかかった日数の割には、あっという間に過ぎ去ったようです。急に暖かくなり、満開までが早く、一気に散ってしまいました。新庄村のがいせん桜を訪れた時は、花吹雪の中でした。まるで雪が積もったように花びらが集まっていました。続いてツツジの季節がやってきて、まぶしい新緑の中で、赤色、白色や橙色の色とりどりの花が鮮やかです。

さて、久しぶりに機関誌をお届けします。3月の指導員講習会、4月には中国地方5県交流会とイベントが続き、やっと発行することができました。原稿を寄せてくれた皆さん、講習会で裏方の仕事を引き受けて滞りなくこなしてくれた皆さん、ありがとうございました。

新しい仲間を迎えて、さらに一層、交流の輪を広げていきましょう。会員の皆さんが、それぞれ興味ある活動に参加するとともに、それぞれの地元での活動を活発化させてください。観察会の企画運営、自然保護活動など会員の皆さんと一緒に進めていきたいと思ひます。

活動報告 (2024年)

NACS-Jの自然観察指導員講習会 2024年

- 開催日：3月9日(土)～10日(日)
- 内容：第606回自然観察指導員講習会
- 場所：岡山県茨川青年自然の家
- 当日の様子：小池さんが報告(後述)

中国地方5県交流会(担当は山口県)と第28回自然観察会

- 開催日：4月13日(土)～14日(日)
- 内容：阿武火山群・アブサンショウウオ・十種ヶ峰のヤマシャクヤク群落
- 当日の様子は藤本さんが報告(後述)

今後の活動予定 (2024年6月の総会まで)

第29回自然観察会—早秋の毛無山の植物

- 日時：4月28日(日)10時～14時
- 場所：毛無山(新庄村)の登山道
- 特徴：早春のブナ林の林床で開花する春植物を観察
- 連絡先：西本 taknishi@js4.so-net.ne.jp
- その他：弁当水筒持参。少雨決行

勉強会

- 勉強会：5月12日(日)13時～16時
- 内容：3月の指導員講習会の反省会と新規指導員との意見交換
- 場所 e-Tam 自然と教育研究所
- 参加費：500円(コーヒーとケーキ)
- 参加希望者は、西本まで

年次総会と第30回自然観察会

- 日時：6月9日(日)10時～15時
- 場所：鬼ノ城ビジターセンター
- 総会：10時～12時 年次総会
- 自然観察会：13時～15時 鬼ノ城の自然保護区で、湿生植物やハッチョウトンボなどを観察
- 連絡先：西本まで

自主活動の報告 (2024年のこれまでに実施したもの)

水辺の生きもの観察会

- 日時：3月17日(日)10時～12時
- 場所：玉野市深山公園
- 当日の様子は藤原さんが報告(後述)

3月9日から10日、岡山県渋川青年の家で自然観察指導員講習会が行われました（写真1）。新しく58名の方が指導員になり、その中から20名の方が岡山の連絡会に参加しています。スタッフは15名で、本部から講師2名を含む5名、NOI岡山からは10名が参加しました。

3月9日、開講式が終わった後すぐに「自然観察の視点」についての野外実習を行いました。まずは、全員で森のスケッチを行うために、3班に分かれて渋川の砂浜に移動しました（写真2）。砂浜から見える裏山の森のスケッチでは、ここに注目して描かれたんだな、など描いた人の個性が出ており、お互いのスケッチを見るのが楽しかったです（写真3）。

続いて、私は講師の一人の秋山さんの班に参加し、裏山の山頂である宮田山への階段を上り見晴らしのいい場所まで移動しました（写真4）。そこで海岸にいた時と宮田山に登った時とで、森の見え方の変化について考え、波音の変化や木との距離、松についてなどいろいろな考え方を聞くことができました。

その後、登山道を下り、渋川八幡宮近くの木々が生い茂る場所に行き、木の種類分けや落ち葉の層の状態、どれだけの生物がいるかなどのテーマにしたがって、受講生の方は手で触るなど体を動かしながら学ばれていました（写真5と6）。

昼食が終わった後、秋山さんの「自然の保護」についての講義がありました（写真7）。続いて、受講生の皆さんから30秒間の自己紹介があり、それぞれにいろいろな自然の繋がり方があるなど感じながら聞いていました。さらに、もう一人の前田さんの「自然の観察」についての講義がありました。

夕食を終えてやっと部屋に入り、お風呂に入るなど、充実した日中の行事が無事終わることができました。最後に、会場を変えて多くの受講生の参加した懇親会が開催され、初めて出会った皆さんはそれぞれ親交を深めていました。



写真1. 開講式



写真2. 砂浜で森のスケッチ実習中



↑写真3. 描いたスケッチを互いに見せ合う



←写真4. 裏山の中腹からの瀬戸大橋と島々の遠望



↑写真5. 木々の茂る森の中での実習



←写真6. 落ち葉の下の生きもの探し



↓写真7. 講義の様子

3月10日の早朝、やっと明るくなったばかりの時間からオプション観察会があり、これにも多くの受講生の方が参加していました(写真8)。福元さんの班に参加させていただき、海岸で貝を探したり岩についている青のりを食べたりと皆さん楽しそうでした。観察会が終わった後で、別々の班の人たちで互いの班の観察会の内容について話し合っているのがいいなと感じました。



↑写真8. 早朝の浜辺で

朝食が終わった後、「自然観察の素材」についての野外実習を行いました。内容は秋山さんの実習では、落ち葉や木の枝などで顔を作ったり(写真9)、周りにあるものを手で触れた時と温度計で測った時の温度の感じ方についてなど、鳥取の連絡会の清末さんの実習では、目をつぶって日光や風を感じたり、地面に寝そべり周りの人の振動を感じたり(写真10)、本部の浅岡さんの実習では、手元にある配色カードに似た色を周りから探したりなど(写真11)、前田さんの実習では蟻地獄や松ぼっくりについて、観察会をする際に気を付けることを聞き、磯にいる生物も観察しました。どの実習でも受講生の皆さんがいろいろなところに移動しながら楽しそうに活動しているなと感じました。



↑写真9. 落ち葉や枝でつくった顔



↑写真10. 地面で寝そべり、人の振動を体験



←写真11. 土の色を色見本と比較

続いて、「自然観察会の企画」が始まり、受講生はミニ観察会のために下見や道具の準備などプログラム作りと計画書作成を頑張られていました。いよいよ「自然観察会の開催」で、私も受講生の方も緊張したミニ観察会でした(写真12と13)。緊張した中でも笑顔が見られる観察会だったので良かったなと思いました。観察会が終わった後で、グループの人が地域の活性化という話題で話し合われているのを見て、少しでも人との繋がりができていたらいいなと感じました。

写真12. 浜辺でミニ観察会→



←写真13. 磯での生きもの探し

怪我をする人が出ることなく講習会を終えることができ良かったです。いろいろな人とお話しすることができ、講義を聴くこともできてとても勉強になりました。講習会を行う側の大変さや考えを知ることもできて良かったです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

写真14. 新規指導員との集合写真→



玉野市は、2024年1月初旬から2月初旬にかけて降水量が少なく、深山公園内の水路には水の無い場所が多く見られました。待望の雨の後に産卵しても晴天が続いて、干上がりそうな二ホンアカガエルの卵塊も多く、水のある場所へ度々移しました。今年の産卵ピークは2月下旬頃で、3月になるとセトウチサンショウウオの卵囊が見られるようになりました。

深山公園、水辺の生きもの観察会 3月17日（日） 10時～12時頃、曇りのち雨。

保育園児1名と小学生5名の参加もあり、長靴を履き、網やバケツを持った21名が自由広場に集合しました。

最初に訪れた紅葉谷では、セトウチサンショウウオの5対の卵囊とオスの成体（写真1）、オニヤンマやカワトンボのヤゴ等（写真2）が見つかりました。セトウチサンショウウオの卵囊には、昨年見つかったような発生が止まって白化した卵は見られませんでした。



写真1. セトウチサンショウウオの卵囊とオスの成体。今年は白化した卵塊は見られなかった



写真2. オニヤンマのヤゴ

繁殖期のオスは顎の下が白くなっていることや、オスは水中で次のメスを待っていること、1対の卵囊の卵の数をカウントする方法等教えていただきました。雨が降り出したので自由広場に急ぎ、水路を探すと、セトウチサンショウウオの2対の卵囊とオスの成体が見つかりました（写真3）。時間外に、もう1対見つかりました。卵囊や二ホンアカガエルの卵塊を食べに来ているのでしょうか、水際にイノシシの糞もありました（写真4）。



写真3. 自由広場で見つかった2対の卵囊



写真4. 水際に落ちていたイノシシの糞

深山用水には、産卵後時間が経過して形が崩れてきた二ホンアカガエルの卵塊や大小のオタマジャクシが多く見られました。産卵して間もない卵塊もまだあり、手で掬い上げることが出来ました。さらさらしていて、ぬるぬると手から滑り落ちるヤマアカガエルとは違うそうです。子供たちが観察した後の生きものを、丁寧に元の場所に戻していたのは印象的でした。

5月下旬には松くい虫予防薬剤散布が行われる予定です。2020年と23年に、セトウチサンショウウオの卵囊があったあたりで、死んだ幼生が見つかったので、散布後が気がかりです。

2024年4月13-14日の2日間、山口県自然観察指導員連絡会の方がたのお世話により、2024（令和6）年中国5県自然観察指導員交流会が開催され、5県から43名が集まり、岡山からは4名が参加しました。

晴天となった4月13日（土）、12時前に阿武町農村センターに着いて、昼食をとるために桜が残る川土手に向かって歩いてゆくと、Fさんからコオニタビラコが咲いていると聞き、川土手から農村センター側の田圃をみると一面に小さな黄色い花が群生しています（写真1）。コオニタビラコは春の七草のひとつ、ホトケノザとして知られる野草で（写真2）、七草粥に入れるのは花が咲く前の若葉ですが、これまで花を見たことがなかったようです。先端に小さな切れ込みが3つある黄色の花卉を8-12枚つけた花は春の光を浴び今が盛りとみえました。農薬を散布していると育ちにくくなるようで、今や稀少な野草となっているのかもしれませんが。

12時30分から受付が始まり、今回の交流会の予定表、参加者名簿、宿舎までの地図、十種ヶ峰の植物と地図、萩ジオパーク推進協議会作成の「地球目線の歩き方」、「地球目線の遊び方」というガイド冊子をいただきました。13時からの開会式につづき（写真3）、伊藤靖子氏（萩ジオパーク推進協議会事務局長）が阿武火山群について解説されました。マグマの活動期を3つに分けて、3回目の萩・阿武のマグマ活動は、1か所で1回だけ噴火して小さい火山をつくり、次は全く別の場所で噴火するという特徴により、約50の小さな火山の集まりである単成火山群を形成し、その結果、萩市から阿武町を中心とする山口県北東部の山々や沖に見える島々が形成されたようです。

ついで永井要明氏による十種ヶ峰の植物について説明があり、最初に、十種ヶ峰ではレッドデータブック山口（2019）のⅠA類に属すクサタチバナをはじめ7種、ⅠB類のジャコウソウ、Ⅱ類はタンナトリカブトほか8種、などの稀少植物が観察できることが説明され、次に、防府市西浦の減少していた天然記念物エヒメアヤメがボランティアの草刈りで千株を超えるまで増えたこと、萩市笠山の天然記念物コウライタチバナが全て枯れたが、残っている幼木を守ろうとしても土地所有者の同意を得にくいため困っていること、など自然保護のあり方について問題提起されました。

15時前、全員が車で移動し、まず伊良尾山のイラオ火山灰層観察施設に移動。駐車場脇に火山弾と金雲母含有鉱物がさりげなく置かれていました。ここで伊藤氏が火山噴火の実験をします、と言って持ってこられたコーラに何かを滴下したところ、コーラの泡が一気に数メートルの高さにまで達し、一同「オオーッ」というどよめき、に包まれました（写真4）。



写真1. 昔ながらの田んぼの風景



写真2. コオニタビラコ（別名は仏の座）



写真3. 講演会場となった阿武町農村センター



写真4. 火山噴火実験。コーラのペットボトルに薬剤を入れると、中身が噴水のように噴き出した（矢印）

保存されている火山灰層は最下層に1億年前の凝灰岩があり、その上に降り積もった火山灰、火山礫層、さらに溶岩流などが層をなしているのが観察できました(写真5と6)。掲示された解説には、阿武火山群は①玄武岩の溶岩台地、②スコリア丘、③安山岩の台地でできている、と書かれています。スコリアについて調べてみると、「噴火により火口から噴出された溶岩流を除く噴出物を火山碎屑物と総称し、火山岩塊、火山礫、火山灰に分類され、その中で暗色のものをスコリアという」、と記載されています。現地のパネルには、伊良尾火山は阿武火山群の中で最も激しい噴火をした火山で、マグマのしぶき(スコリア)を火口から噴水のように吹き上げ、それが火口のまわりに降り積もってプリンのような形をしたスコリア丘(伊良尾山)ができ、さらにそこから大量の溶岩が流れ出して溶岩台地が形成された、と書かれています。



写真5と6. イラオ火山灰観察施設は、道路建設中に見つかり、道路建設が中断してつくられた

火山灰層をあとにし次の観察地である「畳が淵」に移動。県道124号沿いにある広い駐車場から歩いて田万川の川床に下ると、清流が音をたてて流れ下り、周囲は高さ20-30mの太い石柱を立てたような岩壁で囲まれ、足下には六角形に切った岩を敷き詰めたような亀甲状の川床からなる独特の景観が待ち受けていました(写真7と8)。これは伊良尾山の噴火により溶岩流が川に沿って流れ下り、溶岩が冷え固まる時に六角柱の「玄武岩柱状節理」となったため、との説明があり、40万年かけて川の水が岩を削り、崖の下は柱状節理が階段状に低くなり、川床は平らに磨き上げられているようにみえました。いただいたガイド冊子によれば「畳ヶ淵」を含め、溶岩流が川に沿って流れ下ったルートは「龍が通った道」と呼ばれているようです。



写真7と8. 畳が淵の柱状節理。六角形の柱状のものが川で削られて畳敷き状に見える

宿泊先の旅館、千春楽は萩城址のすぐそばにあり、北側の裏口から菊ヶ浜にでて海を眺めることができました。夕食会場では他県の方がたとの話が弾み(写真9)、来年度の5県交流会を担当する岡山の西本先生からは、3月に観察指導員講習会を終え、58名が新たに観察指導員となり、岡山連絡会にも20名が新たに加盟したこと、鏡野町白賀渓谷で1年間緊急調査し、生物多様性の高い地域であることを発表し、風力発電建設に反対する住民の方がたが過半数を超え、現在、建設に向けた手続きは進んでないこと、などが報告されました。そのあと、宿泊部屋の2つを使った懇親会も開かれ大いに賑わっていました。



写真9. 宿舎「千春楽」での夕食会

2日目、朝食のまえに旅館の裏から菊ヶ浜にてて萩城址に向かいました。青く晴れた空を背に新緑の指月山が輝き、城の石垣や朝日に照らされた橋が内堀の水面に美しく映っています(写真10)。正門から天守跡に上がり、指月山登山口を経て、神社の前で県天然記念物ミドリヨシノを観察し(写真11)、東園をまわり、東端の展望所からスコリア丘の笠山を望み、目を転じると、菊ヶ浜を歩く人、釣りをする人がみられました。私は30歳の頃に来て以来、萩を訪ねるのは2回目でしたが、受付でいただいた「わたしの萩旅」には明治日本の産業革命遺産が数多く紹介されており、もう一度ゆっくりと散策できればいいが、と思いながら城址をあとにしました。



写真10. 萩城址と新緑の指月山。左端の石積みに天守閣があった



写真11. 神社の前に残る狛犬と県天然記念物のミドリヨシノ(右端)

朝食後は車で十種ヶ峰(とくさがみね)に移動。標高815mの山麓駐車場で下車し、ここで、ヤマシャクヤク自生地を通るコースとそのまま登攀するコースの2つのグループに分かれ、多くの方がたはヤマシャクルートを選び車に分乗して下りて行かれました。

私とFさんは他県の方々を交え8人ほどでゆったり登攀することにしました(写真12)。広い登山道を進み右手の神角コースへの分枝を過ぎ、鳥居をくぐって賽銭をいれます。しばらく歩くと道沿いには樹皮がやや緑がかったクロモジ、樹皮が鱗状にはがれ斑模様を呈するリョウブ、そして壺形の白い花をたくさんつけたアセビが比較的多く見られました。足元には獅子のたてがみ様と形容されるシダ植物のシシガシラのほかに杉苔に似たシダ植物がありトウゲシバであると教わりました。鳥のきれいな鳴き声が続くので「ウグイス?」と思っていたら、特定外来生物に指定されているソウシチョウではないか、とのこと。帰って調べてみると、笹類の繁茂する標高1000m以下の広葉樹林に生息し、営巣場所が競合するウグイスやオオルリが駆逐されるおそれがあり「日本の侵略的外来種ワースト100」の1種とされています。ルート分枝ポイントから熊野神社コースをとり、しばらく登ると小さな社があり、そこでアブサンショウウオの卵嚢と孵化した幼生を観察できましたが、山頂近くのわずかな水脈しかない場所でなぜ?と思わずにはいられませんでした。ここを過ぎると木々がなくなり山頂付近に至ると一面が笹に覆われて視界がひらけ、四方の山々、日本海の島々、さらに陸上自衛隊むつみ演習場も見られ、十種ヶ峰が山口県と島根県の県境であることを知りました(写真13)。帰路は笹につかまりながら直登ルートを下り、途中遭遇したニワトコは別名、森のブロッコリーとも言われ美味であることを教わりました。



写真12. 十種ヶ峰の山頂を目ざして笹原の中にササを刈り取って整備された登山道を歩きながら、植物や鳥を観察した



写真13. 十種ヶ峰の山頂からは、四方の山々が望められるだけでなく、萩から見た日本海の島々、前日に訪れた阿武火山群を眺めることができた

(ここからは西本が追記) 一方、ヤマシャクルートのグループは、山麓駐車場から山口県の皆さんの車に分乗して、いったん麓の登山口にある八幡宮(標高 390m)まで移動し(写真 14)、22名の皆さんと 989m の山頂を目指して、標高差 600m ほどの急登に挑戦しました。

登り始めの集落には、石州瓦の橙色の屋根の民家があり、民家の庭に山口県で栽培しているというリンゴの花が満開となっていました。急坂が続く植林の中では、日差しが入る斜面に多くの花が咲いていました(写真 16-21)。特に目立ったのはムラサキケマン、フウロケマン、カキドオシ、ハクサンハタザオ、シャク、トキワイカリソウ、ナガバタチツボスミレ、オオタチツボスミレ、アオイスミレ、フデリンドウ、エイザンスミレ、ヒトリシズカ、ツルカノコソウ、ミヤマカンスゲなどでした。



写真 14. 麓の八幡宮から山頂(中央)を目指す



写真 15. 民家の庭で咲いていたリンゴの花



写真 16. ムラサキケマン



写真 17. フウロケマン



写真 18. ハクサンハタザオ



写真 19. フデリンドウ



写真 20. エイザンスミレ



写真 21. ツルカノコソウ

植林を抜けると、明るい広葉樹林に変わり、まだ葉が出ていない樹林の下はとても明るくて日差しがいっぱい届いていました。ここからが山頂に向けて急登となり、急な崖ではロープが渡してあるなど、這いつくばりながら登っていきました。



写真 22. ごつごつした岩の谷の急登を登る



写真 23. 斜面が開けて、展葉が始まった樹林へ

岩が続く急登の谷を登っていくと、少し開けた斜面が現れ、明るい日差しの注ぐ林内では多くの花が咲き始めていました（写真 22 と 23）。さらに上っていくと群生するヤマシャクヤクに出会いました（写真 24 と 25）。まだつぼみでしたが、10000 株はあるといわれても、信じたくなるほどでした。直登の登山道は、群生地に邪魔にならないように配慮され、つづら折れを避けていました。大切に見守ってほしいと願う小さな看板が各所にあり、配慮に満ちた言葉がつづられ、監視している人たちの暖かいまなざしが感じられました。注意喚起の看板で景観を壊すことなく、保護されたこれだけの群生地は見たことがありません。ケヤキの大木の林内は日差しがたっぷりの春を迎えて、咲き始めた多くの花が喜びに満ち溢れていました。まさに、スプリングエフェメラルという言葉があてはまるという思いに浸りながら、大満足で歩いていました。



写真24. 明るい林内で群生するヤマシャクヤク 写真25. つぼみが膨らんでいたヤマシャクヤク

山頂で、阿武火山群を望むとともに、中国山地の山並みが東の方につながっていることを実感しながら、島根、広島方面を遠くに見渡すことができました（写真 26）。記念撮影では急登を登り切った参加者の皆さんの笑顔が満ちていました（写真 27）。（ここまで西本）

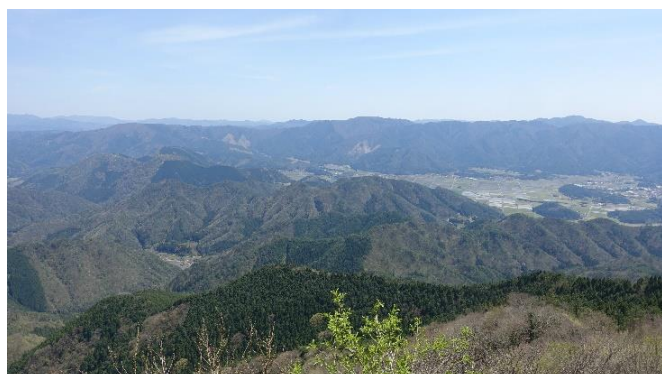


写真26. 十種ヶ峰の山頂からの遠望。中国山地の山並みが遠くまで続いていた

写真27. 急登を登り切った笑顔であらわれていたヤマシャクルートのメンバー

13時すぎ、全員が山麓駐車場に集合して、閉会式を終えて解散となりました。

岡山連絡会の有志で昨年、高知の室戸岬を訪れて以来、私にとって2回目のジオパーク訪問を果たし、火山、地層や自然の成り立ちをより深く考える貴重な機会をいただいたと感じています。



写真28と29. 主催者が撮影した集合写真。左：イラオ火山灰層観察施設、右：壘が淵